

8月バス例会

—柳井市の白壁の街並みと 周辺の史跡を訪ねて—



備陽史探訪の会

歴史民俗研究部会 種本実

〔日 程〕

集合……………7時30分

出発……………7時45分(全員そろい次第出発)

山陽自動車道—玖珂IC—柳井市へ (小谷・宮島PAで休憩)

柳井市着……………10時15分

般若寺(平生町)着………10時30分

見学 ………………～11時

茶臼山古墳着……… ……11時30分

見学 ………………～12時10分

柳井市駐車場着……………12時30分

文化福祉センターで昼食

……………～13時30分

「白壁の街並み」を散策

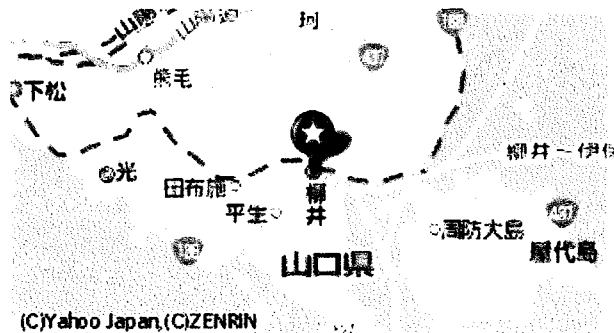
国森家、むろやの園では入館料を支払います

団体行動をお願いします

街並みの見学後、自由行動

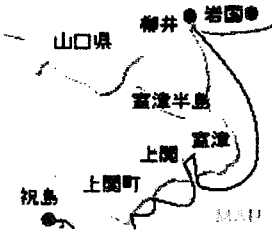
……………～16時出発

玖珂IC—山陽自動車道—福山帰着 19時頃





■柳井の古名「楊井」の由来・・・市内の曹洞宗湘江庵（しょうこうあん）の境内の、柳と井戸にまつわる伝説。豊後の国の般若姫は欽明天皇の皇子・橘豊日命（たちばなのとよひのみこと・後の用明天皇）に慕われて上京の途中、当地に上陸した。里人に井戸の清水を頂き、姫は、お礼に楊枝を井戸の傍らに差すと、一夜にして



芽をふき、柳の木になった。この柳と井戸を結びつけて「楊井」の地名が生まれ、江戸時代に「柳井」に変わったという。現在の柳は（写真）5代目である。般若姫伝説については「用明院般若寺」で紹介。江戸時代の作家、井原西鶴の全国名所旧跡案内記「一目玉鉾」に載った歌碑が

建っている。

「丸雲（あられ）ふる今朝の嵐の吹落ちて柳井の底にくたく玉水」

本尊の虚空蔵尊は日本の3体虚空蔵尊のひとつである。残りの2つは福島県河沿郡柳津町（かわぬまぐんやないづまち）と宮城県登米市（とめし）柳津。虚空蔵尊は知恵と福德を蔵した仏として信者が多く、東北地方では最もよく知られている。江戸時代より湘江庵には諸国より参詣があったと伝えられており今日に至っている。

※ 神峰山用明院般若寺— 熊毛郡平生町 用明天皇の勅願により、姫の父である豊後の国（大分県）の満野長者（まんのちょうじゃ）が聖徳太子の師、恵慈（えじ）和尚という方を開山

として創建した真言宗の古いお寺。真言宗御室派。第九代住職に弘法大師の弟君・真雅（しんが）和尚をお迎えして真言宗に改宗された。



【般若姫の伝説】 般若姫は豊後国の満野長者の一人娘で、

たぐいまれな美女としてこの噂は遠い奈良の都まで伝わって

いった。あまりに美しい姫の評判を聞いて、まだ見ぬ恋に身を焦がされたのが橘豊日皇子（後

の用明天皇)である。豊後の国へ下向され、満野長者の館の牛飼いに身を変えて御縁を結ばれ、二人は愛し合うようになった。都へ帰った皇子はその後、姫を都にお召しになり、姫は恋しい皇子のもとへ百二十隻の船団を従えて旅立ったが、途中不幸にも海上風波の難に遭い、遂に周防大島の浦で逝去された。(一説には、この嵐を避けて上陸し里人から井戸の水を頂いたという。

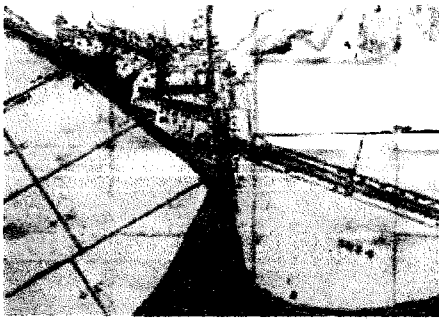
上記「柳井の古名」参照) その時、姫が西方の峰を指して「彼の峰に葬ってほしい」との遺命があり、この地に葬ったのが般若寺建立の由来である。後に用明天皇の御陵もこの地に移され、天皇及び般若姫の御陵墓が今もなお、厳然として玉垣の内に奉祀されている。般若姫の亡骸と、用明天皇の遺髪が納められている用明天皇・般若姫の御陵のそばには、聖徳太子鞭(むち)の池がある。その昔、聖徳太子が、父・用明天皇の墓参りに来た時、供える水がなく困って

いたところ、ここで地面を鞭で突いたところ、清水が湧き出てきたという伝説の池である。他にも般若寺には、用明天皇の勅額や般若寺由来記3巻なども収められている。観音堂右側にある日光・月光の窓(左の写真)は、毎年陰暦の大晦日、丑寅の刻(深夜2時から4時)、海上から上がる火の玉がするすると移っていくという不思議な噂がある。建長7(1255)年の鑄造の銘を刻んだ銅鐘は、山口県最古、一説には日本で5番目に古いといわれ、鐘の形、刻まれた文字(金石文)が鎌倉時代の特徴を示しており、学術上大変貴重であるため、昭和41年6月10日に山口県指定有形文化財(工芸品)に指定された。大内氏、毛利氏の時代には、代々にわたって、崇敬、保護を受けてきた。一山二十ヶ寺の末寺があり、近隣では並ぶものの無い大きなお寺であったが、江戸時代に火災に遭いその以後再建された。

■三十一代・用明天皇・・・欽明天皇の第四皇子。母は蘇我稻目の娘・堅塩媛(きたしひめ)。

● 皇后：穴穂部間人皇女 欽明天皇の皇女 母は蘇我稻目の娘・小姉君(おあねのきみ)。

○ 第二皇子：厩戸皇子(諡号は聖徳太子) - 推古天皇の皇太子・摂政



■「楊井」から「柳井」へ……柳井はその昔「楊井」と呼ばれていた。楊井荘は京都蓮華王院（三十三間堂）領の平安時代からの荘園で、古文書における楊井庄の初見は貞永元年（1232年）「東大寺文書」である。室町期に

は防長で勢力をなした大内氏が東の海門とした港町であり、大内氏の財力の源であった日明貿易の拠点港の一つだった。明応9（1500年）年大内義興は將軍・足利義植を山口に迎えるが、その晦日義植は楊井津に宿泊越年していることから、当時の楊井の繁栄がしのばれる。豊臣秀吉の死後2年目の慶長5年（1600年）に起った関ヶ原の役に、西軍の総大将となった毛利輝元は、敗戦の結果、防・長の2か国に削封され、やがて、毛利氏の一族吉川氏が慶長6年（1601年）に入国（岩国）して、柳井を含む玖珂郡南部はその領地となって代官の支配をうけた。この頃から楊井は柳井と呼ばれるようになった。上の図は享保年間の柳井。

よう【×楊】

〔人名用漢字〕 〔音〕 ヨウ（ヤウ）（呉）（漢） 〔訓〕 やなぎ

木の名。カワヤナギ。ネコヤナギ。「楊弓・楊枝（ようじ）・楊柳／垂楊・白楊（はくよう）」

その後、長い間吉川氏の藩政が続き、明治2年（1869年）の版籍奉還に至った。白壁の町といわれる古市筋には早くから商いの市がたち、いまの町並みは元禄の頃から形成されたものである。江戸期を通して、岩国藩は干拓事業を行い、遠浅の海を埋め立てた干拓地が市街地の南に造られ、江戸中期以降、干拓地には次第に綿花が栽培され始め、綿織物はこの地の代表的な地場産業として、柳井木綿の名で全国的に知れ渡った。柳井木綿を取り扱う商人、菜種、綿実油を絞って販売した商人、そして醤油醸造業に携わった人々が中心になって、江戸中期以降の柳井の繁栄は築かれ、柳井は「岩国藩の御納戸（おなんど）」と称されるようになった。

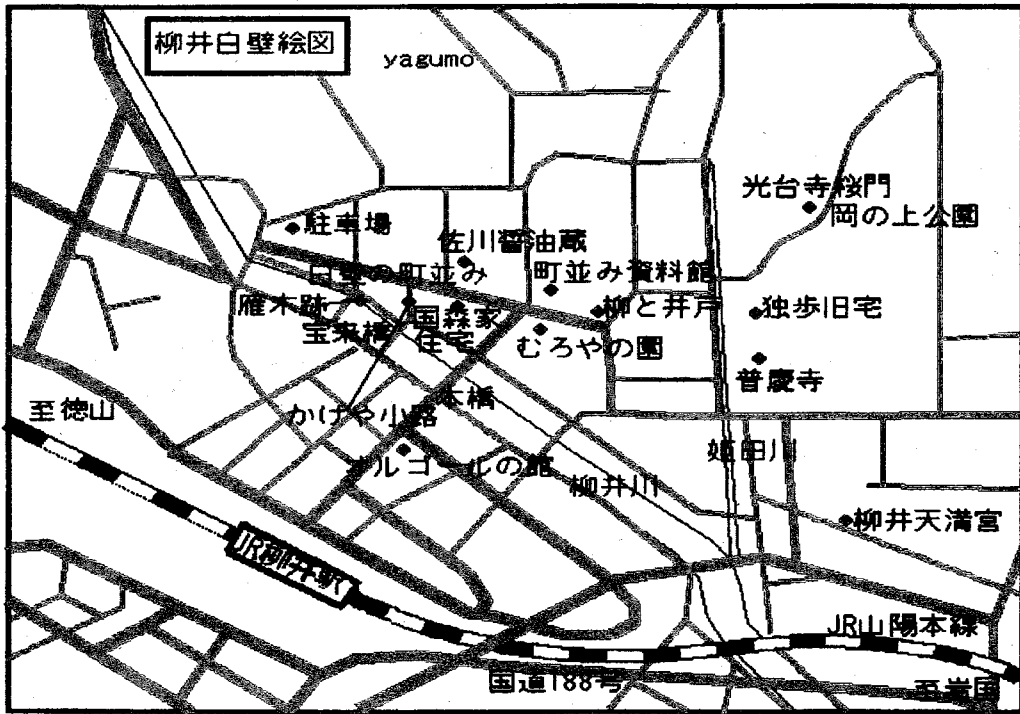
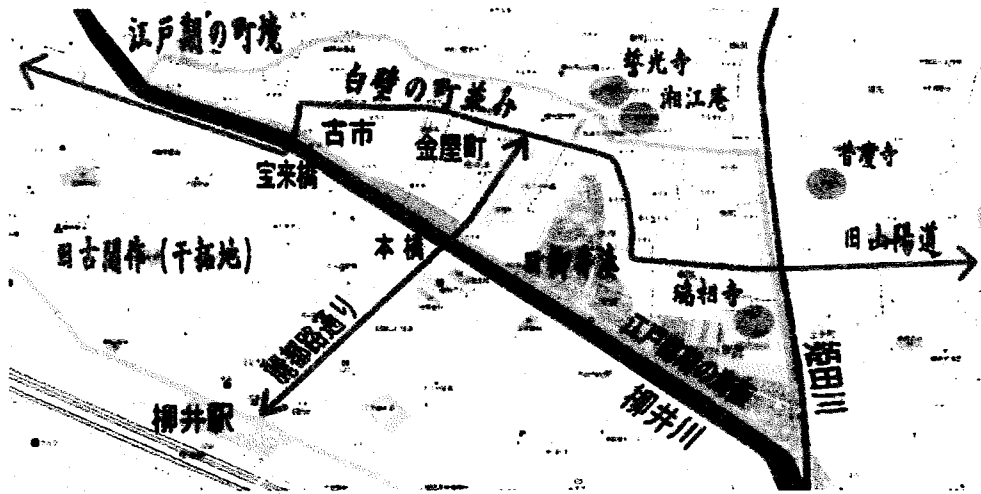
■岩国藩・・・江戸時代、周防（すおう）国（山口県）の東部を領有した藩。藩主・吉川氏は、長州藩毛利氏の一門。ただし、幕府の公認した藩ではなく、江戸では藩に準じた格で取り扱われた。藩でないため参勤交代は認められなかったが、江戸に邸宅をもち、将軍への四季の献上物、当主継嗣（けいし）時には登城謁見が許された。本藩（長州藩）内では内実には自治を許して支藩と同格に取り扱ったが、幕府に対しては家来と称し、藩ではないので岩国領と称した。このように、実際は藩でありながら形式的には藩として認められなかった原因は、始祖・吉川広家（毛利元就の次男の吉川元春の第3子）が関ヶ原の戦いの際東軍に呼応したことによる。広家は1600年（慶長5）毛利輝元から玖珂郡南に3万石（寛永検地高6万石）を与えられ、岩国横山に築いた岩国城に拠った。のち1615（元和元）年幕府の発した一国一城令により、城を破却して山麓の館邸に移った。1847（弘化4）年藩校養老館を岩国に開設、1856（安政3）年には藩創設以来不和であった本藩と和解し、ともに幕末期の難局に対処することになった。1868（明治元）年朝廷から藩として認可。1871年7月廃藩置県により岩国県となり、11月山口県に併合された。

◎岩国市教育委員会 文化財保護課から岩国藩についての説明をいただきました。

「岩国藩は長州藩の支藩」という言い方は実は正確なものではなく、江戸時代の最初から幕末まで「準支藩」という扱いをされていました。「支藩」であれば冠位も授与され、立派に大名として扱われましたが（防長の場合）岩国藩は「準支藩」つまり「支藩以下、家臣以上」であったため、冠位もなく、正式な大名として扱われなかったのです。このように、岩国吉川家は、全国的にみても防長国内でも特殊な家格でした。

家格に対する当時の領民の思いは、残念ながら資料が残っていないためはっきりとは分かりません。吉川家中（武士の間）では、この家格について不満に思う家来が少なくなかったようです。第5代当主広達から第6代当主経永（どちらも幼少で家督相続）の時代にかけて、当主の奥方らと家臣を中心に、家格昇格運動が行われます。公家や旗本の娘との婚姻を結んだり、幕府と直接交渉するなど、家格昇格に向けて頑張りますが、結果は思うようになりませんでした。（幕府としては、吉川家の石高や家柄は大名称として認められるが、とにかく本藩（萩毛利家）の了解がないのに勝手に認めることはできない、という回答でした）逆に、昇格運動にお金を使いすぎて藩財政が逼迫、しかも昇格運動を隠れ蓑に家臣の横領事件が発覚、毛利家を飛び越して幕府と直接交渉したことで毛利家との関係が悪化、加えて享保年間に農民一揆が起こり、この時代の岩国藩は江戸時代を通じて、最も問題の多かった時期といえるでしょう。（元禄年間～享保年間くらいのこと）結局吉川家は家格昇格運動の継続を断念。節儉につとめ、藩財政の健全化や人材育成の方向に目を向けることとなります。

参勤交代の経費は他藩に比べて助かっていたかもしれませんが、その分家格昇格運動に費用をかけすぎてしまったのです



■白壁の街・・・旧市街地の古市・金屋地区には、江戸時代中期から明治初期にかけての伝統的建造物が建ち並んでいる。瀬戸内海の舟運を利した市場町として、柳井川と姫田川の間自然発生的に形成され、中世・近世を通じて、海運を背景に商業都市として繁栄した。元禄期（1700年頃）から70年の間に、柳井の町は100軒以上の家屋を焼失する大火に4回みまわれている。特に明和5年(1768)の大火では、古市、金屋町などの180軒が焼失している。白壁の街といわ

れる伝統的建造物群は、これを契機として建て替えられた家屋で、防火対策のために外壁の柱が全て白壁で覆われた大壁土蔵造りとなっている。火災の際には一階の木製部分は全て漆喰土戸で閉じられる。これらの建造物群の中には、重要文化財の国森家をはじめ江戸中期以前の建物が4、5戸のほか、小田家・佐川家など近世柳井商人の活躍を物語る典型的な町家が40数軒を数える。保存地区は、柳井津でも最も古くに開かれた部分で、中世商業都市の地割を伝えるだけでなく、明和5（1768）年の、大火後の近世後半に建築された本瓦葺で、白い大壁造の町家が建ち並び、保存状況も良好である。

※「松本清張文学碑」— 「白壁ふれあい広場」（観光バス駐車場・観光案内所）の一角にある。松本清張氏の著書「花実のない森」の中に、柳井の白壁の町並みをみごとに描写した一節があり、「珍しい町の風景だ。近年、こういう古めかしい場所がだんだん少なくなっている。世に有名なのは、伊豆の下田と備中の倉敷だが、ここにもそれに負けないような土蔵造りの家が並んでいる。……」と記述されている。平成9年3月16日に故・松本清張氏の御夫人・御子息などを迎えて除幕された。

※土蔵（どぞう）とは、日本の伝統的な建築様式のひとつで、外壁を土壁として漆喰などで仕上げられるもの。日常では単に蔵（くら）とよばれることが多く、この様式で作られた建物は土蔵造り・蔵造りなどといわれる。倉庫や保管庫として建てられるもののほか、保管庫と店舗を兼ねて建てられるものもある。店舗・住居を兼ねるものは「見世蔵（店蔵）」と呼ばれることもあり、倉庫・保管庫として建てられるものとは分化して発展してきた。

◎市内の古市金屋の白壁の町並みは、柳井の繁栄の面影を濃く残す街である。昭和59年に国の重要伝統的建造物群保存地区として、文部省から選定された。保存地区は、この通り約200メートルの両側を中心に、約1.7ヘクタールの区域で、その中で保存すべき建物は47棟指定さ

れている。又、門や板塀など、保存すべき工作物が10件、石積み水路が33本ある。狭いエリア内に観光ポイントが点在しているため、短時間で、色々な観光ポイントを楽しめる。土産物としては、金魚提灯、柳井縞グッズ、国木田独歩ゆかりの三角餅（みかどもち）、岩国藩の吉川公が絶賛したと伝えられる甘露醤油など、柳井ならではの様々な名産が販売されている。

◎ 街並みの保存運動から今日まで・・・・・・柳井市で伝統的建造物群保存調査が始まったのは昭和49年。翌50年には、「柳井市伝統的建造物群保存地区保存調査協議会」が発足し、51年には『柳井市伝統的建造物群保存調査報告書』が刊行される。文化財保護法が改正され、伝統的建造物群が文化財の一つに位置づけられたほぼ同時期の動きである。昭和54年に郷土の町並み保存とより良い生活環境づくりにより、柳井市の発展をはかることを目的としてつくられた「柳井市白壁の町並みを守る会」が発足する。

◎ 具体的な保存に向けての取組み・・・・昭和59年に「重要伝統的建造物群保存地区保存」に選定された。保存地区内の伝統的建造物は、39戸・47棟（所有者は29名）である。昭和60年度から伝統的建造物の保存修理が始まり、保存地区内にある母屋・土蔵・倉庫などの屋根の葺き替えや白壁の塗り直しが行われた。工事費の8割（上限900万円）が国・県・市の負担、2割が所有者負担である。昭和60年代から平成に入ると、歴史的な建物の保存から活用へ、「まちづくり」へと展開していく。古市・金屋地区が重要伝統的建造物群保存地区



に選定されたのを契機に、昭和63年度から「歴史的地区環境整備街路事業」（建設省）に着手し、歴史を活かしたまちづくりが始まり、市街地地区の活性化に向けて取り組みが始められた。「歴史的地区環境整備街路事業」の第

1期事業の中心は、「古市金屋線道路改修・電線地中化事業」（平成2年度～7年度）である。「まちかど広場（写真）の整備」「道路改修事業」「電線地中化事業」が3本柱となっている。「まちかど広場の整備」では、伝統的な町並みの西に位置する場所に広場を設け、周囲

に白壁の外壁をめぐるせ、御影石・鉄平石を敷き、シダレヤナギ・モクセイ・ツツジを植え込んだ広場づくりを行った。「道路改修事業」では、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている区間のアスファルト舗装を改め、長さ270メートル・幅4メートルに御影石を敷き詰め、水路を長石で整備した。また、「電線地中化事業」では、電柱19本を撤去して電線を地下埋設とした。これらの事業により、古い町並みは、整然とした町並みに甦った。

◎宝来橋・・・柳井川にかかる7つの橋の中で、延宝2（1674）年ごろ1番最初にかけら



れた橋。寛文3（1663）年に干拓された「古開作」と、「柳井津」側を結ぶ唯一の橋として人々が往来していた。司馬江漢（江戸時代の絵師）もこの橋を渡ったことが、『西遊日記』（吉田松

陰の旅日記）に記されている。今の橋は明治14（1881）年に石橋である。江戸期の柳井地方は岩国吉川藩の御納戸として栄え、当時の産物は菜種油、蠟、木綿、金物、醤油などで、領内

はもとより上は大坂、下は九州の肥後、五島列島あたりまで、商圏をもっていた。これら商品の輸送は、主として主として海運に頼っていたため古市金屋の間屋は、裏の海岸に船着き場を設けて、20石積み～125石積みの船を横付けにしたり、沖合の大きな船へ小舟で運んでいた。その頃の船着き場の石段、



享和3年（1803）ごろの築造の『雁木』が宝来橋付近に今もなお残っている。

○火伏地蔵・・・柳井は、享保13（1728）年に、この川筋一帯



の家屋177軒が焼失し、その前後にも江戸時代に3回の大火があり、このような火伏地蔵を建立して、火よけの祈願をしていた。宝暦10（1760）年頃の建立だが、花が絶えたことがないという。

▲かけや小路（しょうじ）」・・・

この美しい小路を江戸時代にこの突き当たりにあった豪商「かけ屋」

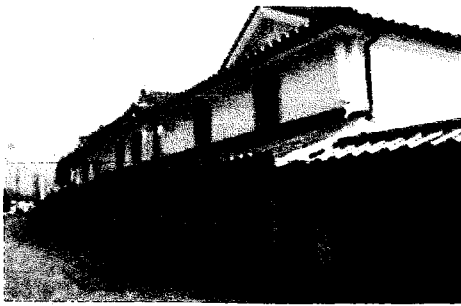


の名が付けられ「かけや小路」という。この小路は、現在柳井川へ直接通ずる唯一の通路である。このようにして作られている水路は、伝建地区内に33本ある。

■「国森家住宅」一（重文） 土蔵造りの商家。国森家住宅は、藩政時代に瀬戸内沿岸屈指の商都として栄えた、柳井津古市・金屋筋のほぼ中心にある。この住宅は、明和5（1768）年の大火の後建築された。土蔵造りで桁行（奥行）が16.5メートル、梁間（間口）が8.5メートルの二階建入母屋造。妻入の本瓦葺で、南面及び北面（正面）にそれぞれ半間（約90センチメートル）の本瓦葺庇がつく。現在の国森家は当時の本宅であったと推定される。

この住宅は一部改変のあとはあるが、全体の規模や構造は変えられておらず、柳井津に残る近世の商家造りの典型として重要である。昭和58、59年度に文化庁の指導により7,200万円の経費をかけ解体修理及び正面などの復元が行われた。全体を土蔵造とし、一階正面に「蓆帳（ぶちょう）」と呼ばれる建具が建てこまれている。この「蓆帳」は、三枚の板戸からなり、最上部の板戸は日中、内側に跳ねて吊り上げておき、使用人の蒲団を収納した。他の板戸は柱に彫った溝に沿ってはずして全開するが、夜間は全部を閉める、機能的で開放的な商家の建具である。

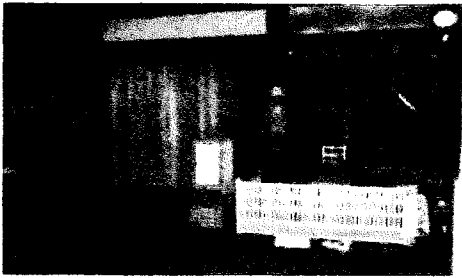
女竹を編んだ上に壁土を乗せた天井や、蓆帳の前の、取りはずし可能な土戸など防火対策が設えてあり、防犯には隠し階段、さらに四天柱状（一階と二階の4柱は、一見すると一本が貫いているように見えるが、実際は一階との二階の柱は別である）の「二重梁式和小屋組み」という、太い柱と梁を組み合わせた造りも特徴の一つである。座敷の板戸と天井板は、当時は禁制の屋久杉を用いた豪華な造りに目を見張る。土間の中央部分の天井に穴をあけ、商品をつるして上げおろししていた木製の「滑車」は当時のままで残っている。この住宅は北側（正面）が道路に面し、南の裏側は柳井川に通じる。現在は西側に車庫、裏側に離れを増設している。平面は、西側に裏まで通じる土間、東側に縦に三室をとり、その奥には台所と座敷を横に並べる。一番前の室はミセになっている。室屋は享和3年（1803）より手紋りともし油の製造を始め、後に贅（びん）つけ油の製造販売を業としてきた富商であった。



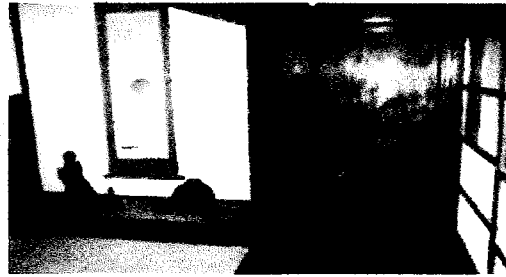
国森家前には犬矢来がみえる



蓐帳が上に上げられている



ミセ先 ここで商品の取引を行っていた

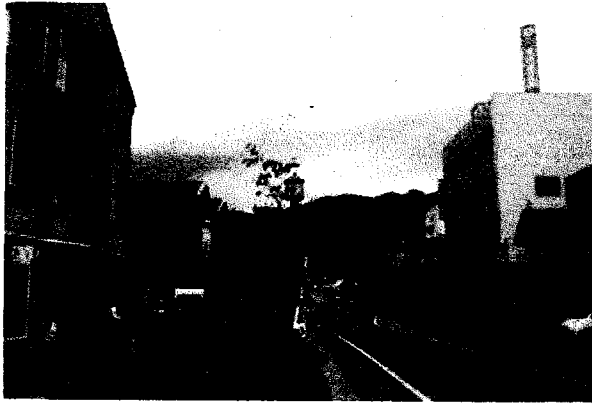


座敷には屋久杉、板戸と天井が見える

▲本橋（もとばし）・・・・・・柳井川は寛文3（1663）年の干拓により人工的に作られたもの、この橋は本橋（もとばし）といい、明治38年（1905）新たに柳井町が発足した時、記念にかけられたもので現在は二代目。

JR柳井駅前から、本橋に向かって歩くと、明治・大正風のお洒落な雰囲気漂う通りがある。

平成16年に完成したこの通りは、愛称を一般公募したところ、全国6,305点の中から柳井市の市民が応募した「麗都路通り（れとろどおり）」が採用され命名された。通りのシンボルは、オルゴールの館「グリム」。日本で唯一のオルゴール作曲家・橋本勇夫さん（広島在住）の曲を奏でるディスクオルゴールが設置されており、その調べは自動演奏され、10分おきに麗都路通りにその心地よいメロディーが流される。毎週日曜日には「麗都路日曜朝市」が開催され、4月の「柳井天神春まつり」、8月の「金魚ちょうちん祭り」、11月の「柳井まつり」の祭りでは、メイン会場として多くの人で賑わう。



〔麗都路通り〕



〔金魚ちょうちん祭り〕

◎麗都路通り・・・それまでの、12mの道路を20mに拡幅した。結果、道路がカーブしているため見えなかった旧周防銀行(明治後期の建物)が、柳井駅の正面に見えるようになった。これがモチーフとなり、駅から柳井川に架かる本橋までの街路イメージを、明治後期から昭和初期の雰囲気とすることにした。当雰囲気にて店舗も建て替えた。歩道は当初計画の片側3mから5.5mに広げたが、今では毎週日曜日に朝市が開かれ、地元の農産物や海産物が売られて

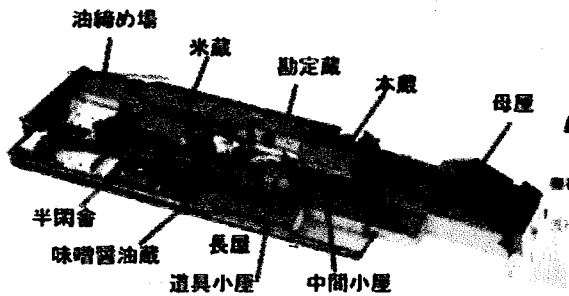
いる。



◎「金魚ちょうちん」は、幕末の頃、柳井津金屋の熊谷林三郎(くまがいりんざぶろう)が、青森県の「ねぶた」にヒントを得、伝統織物「柳井縞」の染料を用いて創始した

といわれている。それを、戦後に独自の技法を加えて今日の新しい金魚ちょうちんを完成させた。古くは多くの家々で、おとなたちが子供に作って与えていた。また、氏神様の祭礼などに「お迎えちょうちん」の中に交じって、色どりを添え、今日では全国民芸品番付でも上位にランクされるなど、山口県の代表的な民芸品に成長した。

■商家博物館「むろやの圖」……江戸時代中期から、小田家が屋号として用いていた「室屋」(むろや)に由来して名付けられた。妻入り入母屋風、2階建土蔵造りの商家。向かって右側に一部大屋根を配しているのが、いつの時代か隣の屋敷を購入して、間口を広げたこと

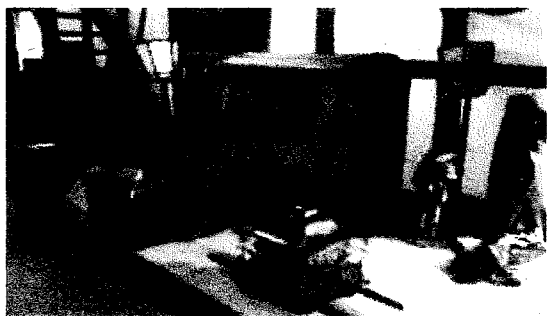


がわかる。国森家と同様、前の板戸は「葎帳」といい、上の戸は吊り上げて、下の板戸は柱に彫られた溝に沿って取り除いて商いをしていった。又前の長石に溝があり火災のときは封じ、類焼を防いだ。「室屋」は、元禄元年(1

688)に小田善四郎が、この柳井津で商いを開業したのが始まりで、当時は、すげ笠、打ち綿、反物などを扱っていたが、次第に油を主とした商いに移り、後には大地主となった豪商のひとりである。最盛期には、20石から125石船を50隻も抱えて、西は九州五島列島から、東は大坂と手広く商取引を行い、西日本でも有数の油商であった。岩国藩主から帯刀も許され、町年寄を勤めた主もいたという。

この建物は、現存する古文書、絵図面、祈禱札などから、享保17(1732)年頃建築されたものといわれている。この家の敷地も細長く、間口は東西に約20メートル、奥行きは南北に約119メートル、敷地面積は800坪もあり、わが国に現存する町屋のなかで最大級のものである。8室もある母屋をはじめ屋敷内の建物は、主屋、本蔵、勘定蔵、米蔵、油絞り場、中間部屋、道具部屋、馬小屋、長屋など全部で11棟も現存し、江戸時代から明治にかけての、豪商の貴重な生活用品が数多く残っていて繁栄を誇った柳井商人の暮らしぶりが伺える。商具、江戸時代の本格的なもてなし料理、藩主・吉川公の調度品、祭事用具、旅用具、生活用品、火縄銃や鎧、兜、明治時代以後の豊富な教科書までも展示してある。屋敷内の展示品は、小田家が代々使ってきたものがほとんどで、昭和54年、生活用品1500点、古文書1100点が建物とともに、山口県有形民俗文化財に指定された。藩主吉川公の磯遊びのときの宿となった「半閑舎(はんかいしゃ)」は、一階は数奇屋造りで式台玄関を持つ。裏長屋門の外は柳井川に面して、他の商家同様に船運によって商品を運んでいた。油絞り場には小田家の主業であっ

た菜種油を絞る道具が展示してあり、米蔵には、小作人が納めた米俵が最盛期には2千俵も入っていたとか。本蔵には、江戸・明治時代の装身具の数々が、勘定蔵には祭事用具や兜、鎧、甲冑や火縄銃などなど商家博物館の名に相応しい数だ。裏長屋門のそばには種田山頭火の句碑が建ち「また孫人になる 新しいタオルいちまい」と刻まれてある。山頭火が昭和14年9月27日に市内の句夕・藤田文友宅に一泊し詠んだ句である。



〔旅用品〕



〔ミセの間〕



〔中庭〕



〔座敷〕

◎種田山頭火・明治15年(1882)山口県防府市の造り酒屋に生まれたが、11歳のとき母親が投身自殺、これが一生の心の傷となる。大正5年(1916、35歳)、家が破産し妻子を連れて熊本に移り住み、文具店「雅楽多」を営むことに。しかし自身の苦悩から逃れることができず、家業は妻に任せ、酒と俳句に埋没する日々を送る。大正14年(1925、44歳)に出家、熊本市植木町の味取(みとり)観音堂の堂守となるが、その後も放浪の旅を続け、昭和15年(1940、59歳)10月11日、四国松山で倒れる。山頭火の墓はふるさとの山口県防府市にあるが、妻が熊本に住んでいた関係で、分骨されて熊本市にもある。

※「町並みふれあい館」— 明治40年(1907年)に周防銀行として建設されたもので、当時の



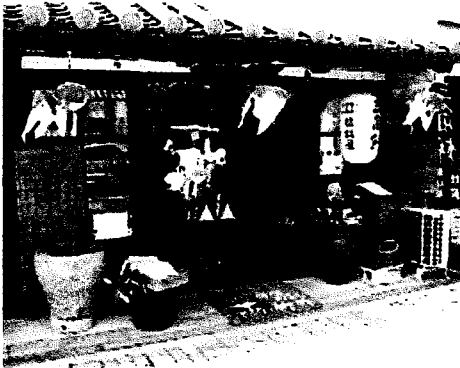
銀行の重厚な姿を今日に残す日本でも数少ない建物のひとつ登録文化財に登録されている。周防銀行は、その後合併を重ね、最後の所有者の(株)山口銀行から平成10年末に柳井市に寄贈され、これを活用するために生まれた施設。1階は町並み資料館として重要伝統的建造物群保存地区の模型を展示し、かつての柳井市の町並みを再現し、2階は

出身の往年の大歌手、松島詩子記念館として、昭和の日本歌謡界に多くの足跡を残された氏の業績を偲ぶため、遺品の一部を公開している。代表曲「マロニエの木陰」などのレコードやポスター、愛用したピアノなどを見学できる。銀行が建つ以前は、呉服商の堀江家があった。明治の文豪・国木田独歩が21歳の明治25年(1892年)2月、父母とともに始めて柳井に住んだ所。それを記念して昭和39年、柳井ライオンズクラブによって、玄関右側の卵型の「いしぶみ」が建てられた。「いしぶみ」は、独歩が、田布施町に仮寓していた明治24年(1891)、近所の少女に「よく勉強するように」と書き与えた『読書の戒(いましめ)』。

『読書の戒』 書を読むは多きを 貧るにあらず 唯章句熟読を要す 静思すること久しければ 義理自然に貫通す

◎松島詩子・・・柳井市名誉市民。昭和12年、自身の弾き語りによる「マロニエの木蔭」がヒット。昭和26年1年、第1回NHK紅白歌合戦に出場。以後計10回出場する昭和53年、勲四等瑞宝章受章。平成8年心不全で死去、(満91歳)。

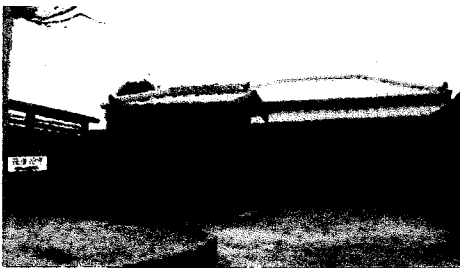
■ 藤坂家と「三角餅(みかどもち)」・・・「三角餅」は独特の形をした柳井の郷土銘菓で、



こしあんを牛皮で包んだもの。文化3(1806)年に当時の藤坂屋の主人が考案し三角餅(さんかくもち)の名称で販売していた。明治28年、自分は村上天皇の第3皇子・具平(ともひら)親王の末裔だという人へ茶菓子として差し出したところ、感動し「帝餅」と記された看板を贈与されたが、畏れ多いので「三角餅」

の字を当てた言われている。明治の文豪国木田独歩の小説「置土産」にも登場する独特の三角形。

「餅は円形(まる)きが普通(なみ)なるを故意(わざ)と三角に捻りて客の眼を惹かんと企(たく)みしやうなれど実は餡(あん)をつむむに手数のかゝらぬ工夫を不思議にありて、三角餅の名何時(いつ)しか其近在に広まり、此茶店の小さいに似ぬ繁盛.....」国木田独歩が明治27年8月、「藤坂屋」の離れにいたころを回想した作品「置土産」の冒頭に記述されている「藤坂屋」の「三角餅」を紹介した部分。「置土産」の登場人物のモデルは、実在の「藤坂屋」の主人、娘、隣の八幡宮息子らである。また、その頃の作品として「欺かざるの記」もある。



☆国木田独歩・・・明治4年7月15日～明治41年千葉県銚子生まれ。裁判所勤務の父に従って山口県に住む。20歳から22歳(明治25-27年)の間を、柳井市の旧宅(前頁の写真)で過ごした。ここには独歩が愛用していた机や

月琴などが納められ、周囲の閑静な佇まいが今も当時の雰囲気を残している。彼の作品『少年の

悲哀』や『置土産』などは、柳井を舞台にしたもの。

※甘露醤油資料館(佐川醤油店)・・・天保元(1830)年、甘露醤油が柳井で生まれて約200年。伝統が息づく醤油蔵の一部が資料館として公開されている。また甘露醤油や醤油を使ったふりかけを販売している。佐川醸造の蔵の歴史は古く、明治以来百年以上もの風雪を経て今尚その堂々たる構えは、訪れる人々を魅了してやまない。

天明年間、時の岩国藩主・吉川公は、柳井津に美味なる醤油有りとの報に、これを所望。そこで、特に醸造の秘技を凝らした再仕込醤油を献上したところ、その芳醇な味と香りに



思
公
の

め
道

わず「甘露、甘露」と歓声を洩らされたと伝えられている。それ以来「甘露醤油」の称のもと、この伝統の逸品は、代々周防国柳井津発の銘品として日本全国に多くファンを獲得し、昔と変わらぬ製法で今日まで造り続けられている。鉄道唱歌にも謳われた、その美味。時は明治。「汽笛一声、新橋を」で、日本に始めて鉄道が敷かれたのは、明治5(1872)年の10月14日、新橋-横浜間。『鉄道唱歌』は、その後日本全国津々浦々に主要鉄道路線が広げられていくに従い、沿線の町の歴史や風物、また名産品などを歌詞に織り込んで作詞され、明治・大正・昭和を通じて広く愛唱されたが、甘露醤油は山陽本線沿線の港町・柳井津の産物としてこの歌詞の中に歌われている。(この項は「佐川醤油蔵」のHPより引用、参考にしました)

■やない西蔵と柳井縞・・・やない西蔵は、大正時代末期に建築された木造瓦葺平屋建て、白壁土蔵造りの建物で、1980年頃までは、西蔵という愛称の醤油蔵として使用されていた。貴重な観光資源として保存活用していくため平成10年、所有者より寄贈を受けた。当時の外観、中の骨組みをそのまま残し、平成13年4月、体験工房、ギャラリーなどの機能を備えた複合型観光施設として生まれ変わった。金魚ちょうちんづくり、柳井縞の機織り等の体験ができる。柳井縞は木綿商人が農家の女性らに原料渡し織り賃を支払い、その後製品を引き取る「綿替」という方法で、現在の山口

県柳井市を中心に発達した。その後宝暦10（1760）年に岩国藩が織物の検印制度を開始、その品質を認められ、江戸時代中期ごろには柳井木綿として日本全国にその名が知れ渡るようになった。明治時代後半には織物業が衰退し、柳井織は大正時代初期より入手が困難となった。最近になって「新生柳井織」として復興の気風があり、「柳井織の会」も発足。「やない西蔵」で機織りや、あい染め体験を実施。草木染による多彩な縞柄を開発した。

※茶白山古墳— 全長が90m、後円部径60m、前方部幅55m、後円部高さ8m。4世紀末から5世



紀初めの築造。明治25年に銅鏡5枚が発見された。このうち特筆されるのは、わが国最大級の単頭双胴怪獣鏡（面径44.8cm、重さ8.950キログラム東京国立博物館蔵）である。平成3年から発掘調査を行った結果、後円部が三段・前方部が二段に築かれて

いたこと、前方部は後円部より4m低い、古墳全体が葺石で覆われていたこと、竪穴式石室が二基造られていたこと、古墳の平坦面には145基の埴輪が立て並べられていたことも確認され復元された。埴輪は円筒埴輪を主体に、朝顔形埴輪、蓋（きぬがさ）形埴輪など多彩な構成をなしている。西側の竪穴式石室は、床に粘土を敷き上に木棺を安置し、南の室津湾産の安山岩を積み重ねている。東側は未調査だが、西側よりやや小さく、粘土で棺を包み込んだ粘土槨と思われる。副葬品は、大型の鉄刀・鉄剣や、多数の鉄刀子（小刀）、勾玉などである。埴輪で覆われた巨大な古墳は、はるかな遠方からも崇めることができ、支配者（周防国造と目されている）の墳墓の権威の象徴として聳えていたことであろう。柳井市では、平成6年度から歴史的財産である茶白山古墳を整備するための工事をおこなってきた。総事業費は、約5億円。平成3年度から8年度にかけて行われた埴丘発掘調査で出土した埴輪と、平成4年度に実施した石室清掃調査で検出された副葬品は以下である。（柳井市HPより）



埴輪は、円筒埴輪（55基）・朝顔形埴輪（Ⅰ：大きくて橙色・・・14基、Ⅱ：少し小型で肌色・・・14基） ・器台形埴輪（14基） ・壺型埴輪（28基） ・蓋形

埴輪（14基）・家形埴輪（8種類・10棟以上）が確認され、その個体数は145基以上と推定され1.5～2m間隔で立っていた。家形埴輪がこれほど多種多量に出土した例は全国的にも少ない。

表面にはベン柄を塗り赤く着色されていた。海のほうから見られることを意識してか南側に多く立っていた。これからの埴輪は、胎土で2種類に分類できるが、うち1種類（円筒・朝顔形Ⅱ・壺形・蓋形・家形の各種埴輪）は洗礼された畿内色の顕著なもので、職工が柳井に来たか、あるいは完成したものを船で運んだものであろう。他の1種類（朝顔形Ⅰ・器台形）は胎土が赤く肥厚しており、地元で作成したものと考えられる。これらのことは、当時の埴輪生産と供給の問題を解く貴重な資料である。副葬品は、直刀1点（全長86.2センチメートル）、剣2点（完成品1点 全長81.8センチメートル）、刀子10点以上の鉄製品と、勾玉3点、管玉1点が出土した。勾玉は硬玉（ヒスイ）、管玉は緑色凝灰岩製。熊毛地域最古の国森古墳では、玉類が副葬されておらず、その次に築造された茶臼山古墳で玉類が備わるのは、首長権力の象徴おして、「三種類の神器」（剣・鏡・玉）が揃ったことになり、この時期により首長墓としての定型化が始まるとみられる。

※ 国森古墳・・・熊毛郡田布施町。前方後円墳は、山口県では4世紀中頃からつくられるが、この古墳はそれより古い形の四角形の方墳で、一辺が約30mもあり、古墳時代前期（4世紀初）に築かれたと考えられている。古墳中央部の二段掘りの大きな墓穴の床の朱の広がりから、粘土の床の上に長さ4mもある箱式木棺があったと推定される。

副葬品は、銅鏡、鉄製武器、鉄製工具。



埴輪出土状況



鼻石が施された透出

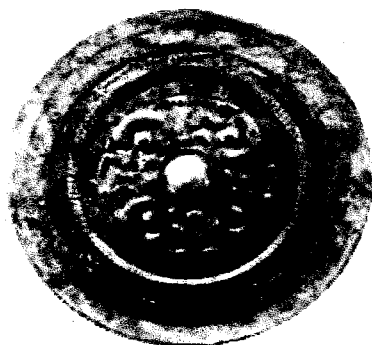


西側埋葬施設

[柳井茶白山古墳のパンフより一部を引用]

☆ 出土した鏡・・単頭双胴怪獣鏡は漢式鏡を模して日本で作ったぼう製鏡である。神（仙人）と獣をみ合わせ、一つの頭に二つの身体をもつ奇妙な図柄を主文様とし、小竜なども配している。図像を形させ漢字を略してはいるものの、精緻なレリーフで、大鏡によく鑄上げており、当時の高度な技術レベルがわかる。画文帯神獣鏡（径18センチ・山口県博蔵）だけが中国製で、他に四神四獣鏡（22.8センチ・東京国立博物館蔵）、内行花文鏡（径19.5センチ・個人蔵）がある。

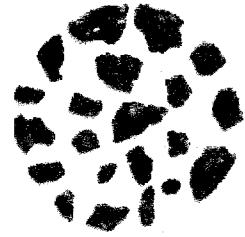
<画文帯神獣鏡>



単頭双胴鏡怪獣鏡

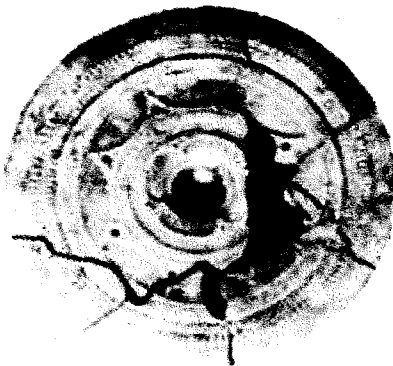
画文帯神獸鏡

現存の鏡4面のうち唯一の舶載鏡で、約30片に割れた状態で発見された。推定面径18cm、内区には神像、走獣禽像などがうかがえる。

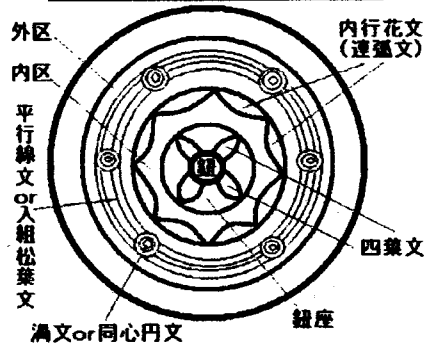


半円方形帯の方形内に「百身長楽」の銘文があり、これにより渡来鏡とされている。仿製鏡（倭製の鏡）の方形内は「〇」等のデザインとなっている。—柳井市教育委員会—

■内行花文鏡



<内行花文鏡(連弧文鏡)>

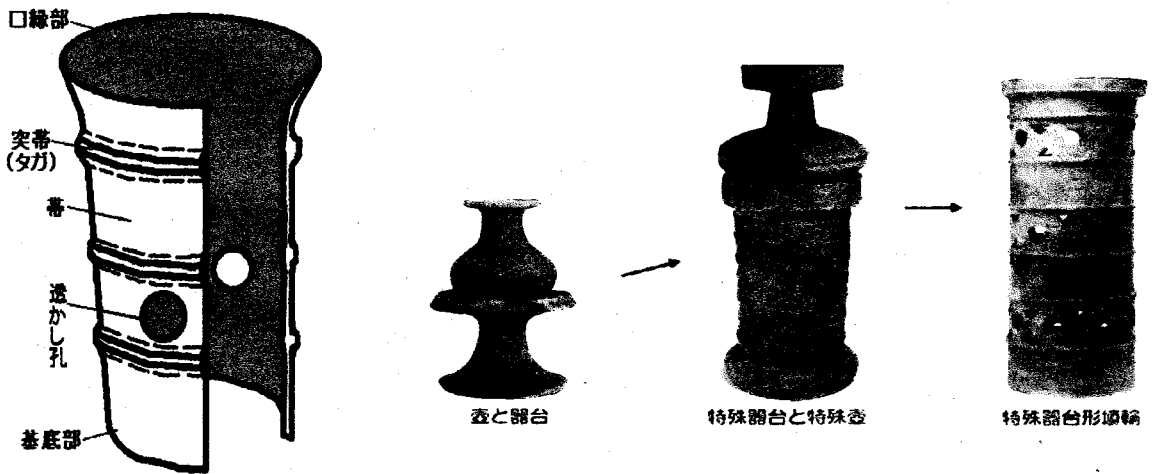


[柳井茶臼山古墳出土]

この鏡は、「茶臼山古墳」から出土した5面（現存するのは4面）の鏡の内的一面で、同古墳出土の内、市内に存在する唯一のものである。良質白銅の青銅鏡で、面径19.5センチメートル、厚さ縁部6ミリメートル、中心部が2ミリメートル、総重量542グラム。現状は大小九片に破れ、部分的に欠失する。圏帯の外側には、直行櫛歯文帯がめぐり、内区の主文様である内行花文につづく。内行花文は半円孤形を連環状に八個めぐらしたもので、花文間にはそれぞれ突起した小乳を中心に、蕨手（わらびて）様文が配されている。内行花文帯の外側には、細い珠文帯、

複線鋸齒文帯がめぐり、ここまでが内区。外縁は二重の鋸齒文帯を経て平縁で終る。この鏡は、基本的には後漢鏡の一つを主たるモデルとした、倭製の鏡（倭鏡）—（中国の鏡をまねて日本人が作ったものと考えられる）—であり、八花文であること、花文間の垂幕結紐文が大きくくずれていないことなどからみて、比較的古い時期の作品とされている。

◎円筒埴輪 壺を載せる器台をかたどった埴輪。当地のものは上部がやや広がり突帯が4本めぐっている。最下段（土の中に埋まっている）は半円形、2, 4段目に長方形の透かしがあげられている。（下記の図は柳井茶白山古墳の埴輪ではなく例です）



◎壺形埴輪・・・口の部分が大きく開く壺の形をした埴輪。

当地のものは見つかった埴輪の中で最も径が大きくていねいに仕上げられていた。円筒埴輪の上に載っているように見える。

◎器台形埴輪・・・器を載せる台状の土器をかたどった埴輪。最上段の透かしは長方形と三角形の二種類が確認された。

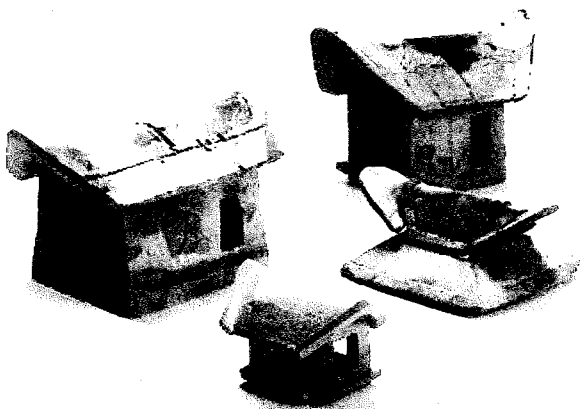
◎蓋（きぬがさ）形埴輪・・身分の高い人が権威の象徴として、頭上にかざした日傘をかたどった埴輪。4枚の立ちかざり部とそれを支える笠部で作る。当地では円筒埴輪の上に載せて立てられた。



〔朝顔形埴輪の例〕



〔蓋形埴輪の例〕



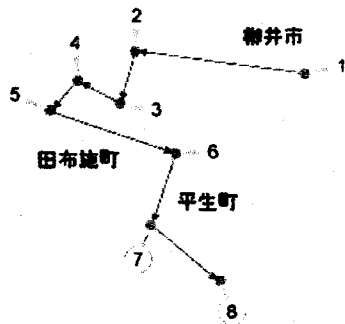
〔家形埴輪の例〕

大塚市立博物館◎

熊毛王国の古墳を巡るコース

現在の柳井市街地から田布施町・平生町の低地一帯は、かつて古柳井水道と呼ばれ、海峡であつ

たといわれている。この海岸に沿って、熊毛王（仮称）の系譜の古墳が築造され、一部は復元整備されている。



① 茶白山古墳（柳井市・国指定史跡）前方後円墳 直径約 45cm の大鏡が出土復元整備し、直近に茶白山古墳資料館あり

② 納蔵原古墳（なぐらばら）（田布施町 前方後円墳）6世紀 横穴式石室をもち、瓦質の埴輪が出土

③ 田布施町郷土館 田布施町の古墳から出土した遺物などを展示

④ 後井古墳（田布施町 円墳）県内古墳最大級の横穴式石室 6世紀末から7世紀初頭

1号墳は内部に全長 11.9m の右片袖式石室を持つ

⑤ 木ノ井山古墳（田布施町 円墳）山口県土槲を埋葬主体とする三体合葬の古墳

⑥ 平生町歴史民俗資料館 平生町の古墳から出土した遺物など展示

⑦ 神花山（じんがやま）古墳（平生町 前方後円墳。墳長は 30.3m）一部復元 4世紀終わり頃～5世紀初め頃組合式箱式石棺 女王のものとされる骨が出土。復顔後の女王像が立つ

⑧ 白鳥古墳（平生町 5世紀半ば 前方後円墳）県内最大（120m）の古墳

◎この冊子は、柳井市に関するホームページ、中でも柳井市、柳井市商工会議所のホームページなどを参考にしました。また、柳井市教育委員会生涯学習課文化財室からは豊富な資料をいただきました。さらに問い合わせには丁寧なご回答をいただきました。あつく御礼申し上げます。 平成22年7月22日

鏡の知識

鏡の組成

古墳時代の鏡は、青銅（銅と錫の合金）を鋳型に流し込んで作りました。

鏡の分類

●輸入品・国産品という分類

船載鏡：中国からの輸入品

●鏡背面のデザインによる分類

内行花文鏡・面文帯神獸鏡・四神四獣鏡

ただし、これらの呼称には様々な意見があり、名称も統一されていないものもあります。また、より専門的に小さく分類する場合があります。

鏡の用途

鏡は、現在では顔や姿を映す道具ですが、古墳時代には神を祀る道具（呪術用具）三種の神器にも八咫の鏡があります）として、また当時貴重品だった鏡を持つことにより、自分の権力を誇示したと思われる。

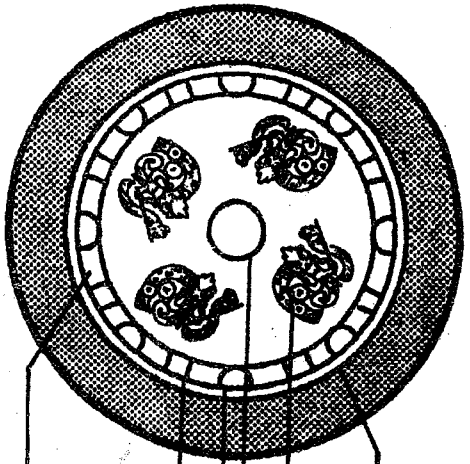
鏡の表裏

古墳時代の鏡を展示する場合、普通は裏側（鏡背）を見せます。裏側は文様で飾られ、表側は滑らかに磨かれており、メッキを施したのもあったようです。鏡はカーブミラーのように中央が盛り上がった凸面鏡が多く見られますが、平面鏡や凹面鏡もあります。

鏡の文様

鏡の文様には、中国の思想や流行に基づくものも多く見られます。例えば、神獸鏡のように中国の神話に因んだ神像（仙人等）や獣像（龍等）を描いたものもあれば、子孫繁栄を願ったり、鏡を持つ者に幸福をもたらすといった吉祥句を入れた鏡もあります。

いずれも中国の人々の理想とした世界を表現していますが、当時の日本人にはあまり理解されなかったようです。また、仿製鏡では、漢字を知らなかったこと、技術的に複製できなかったこともあり、簡略して作っている部分もあります。



この鏡より内側を内区（内帯）
外側を外区（外帯）と呼ぶ

乳（にゅう）：円盤状の小突起

鈕（ちゅう）：紐通しに使用

半円格（はんえんかく）

方形格（ほうけいかく）

半円方形帯（はんえんほうけいたい）

単頭双圓鏡と小鏡

単頭双圓鏡という名称は、右図の大きい方の像からつけられました。この像は、竜の頭から竜の胴体と神の胴体が出ており、乳を廻るように配置されています。

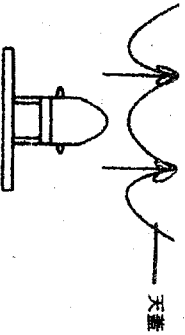
また、その横には小竜が描かれており、巨と呼ばれる棒状の物を口に垂えています。この鏡はだ竜鏡とも呼ばれますが、「だ竜」とは、鱗の一種とも、蛇のような手足の無い竜ともいわれています。



玉座と天蓋

天子が座る場所を玉座といひ、その上に垂らしている蓋のことを天蓋と呼びます。天蓋は、左図のように紐で結んで天子の姿が見えるようにすることがあります。

この間けているときの天蓋の形が、内行花文鏡のモデルとなりました。古い鏡ほど天蓋部のくびれたところに結んでいる紐を描いていますが、時代が新しくなると、○等のデザインとなったたり、省略されたりします。



茶臼山古墳出土の鏡と鏡

柳井市の柳東地区にある茶臼山古墳は、明治 26 年 (1892 年)、地元の 2 少年によって偶然発見されました。数日後、警察官立ち会いのもと、村人達によって石室が発掘され、銅鏡 6 面・銅鑲・鉄剣などが出土しました。そのうちの鏡 1 面 (早稲双頭極楽鏡) は古墳時代の鏡としては、わが国最大で、この古墳を全国的に有名にしました。昭和 23 年には、国の指定史跡となっています。

柳井市では、茶臼山古墳築期 100 周年を記念して、現存する銅鏡 4 面、銅鑲 1 面の複製を行いました。

茶臼山古墳出土の鏡と鏡

中国の鏡を模して日本で製作された仿製鏡です。

主な文様は、単頭に神 (仙人) と獣 (だ竜) の双頭が付いた奇妙な鏡で、それが大きな乳を取り巻いています。傍らには神を唾えた小竜を配し、それらの図形を 4 方に展開しています。その内区外側には半円形と方形を交互に配した帯が巡っていますが、その方形内に刻むはずの漢字は○印に磨かれています。外区には虫状化した竜の像などを配しています。

図像や文字を變形させていますが、精緻にレリーフし、日本一の大きさによく磨上げていることから高度な技術を有していたことがうかがえます。

「だ竜鏡」あるいは「變形神獣鏡」とも呼ばれます。

東京国立博物館蔵 直径 44.8 cm 青銅製

四神四獣鏡

内区には、乳を半環状にして簡略化された竜を 4 方に配し、その間に變形した奇異な仙人の像をレリーフしています。

半円方形帯には銘文は見られません。

東京国立博物館蔵 直径 22.8 cm 青銅製

茶臼山古墳出土の鏡と鏡

現存する鏡 4 面のうち、これのみが中国からの舶来鏡で、精緻な磨上がりとなっています。しかし、破損が甚だしく、約 30 片に割られています。

内区に描かれた主な文様は、神 (仙人の東王父や西王母など) 像と獣 (走獣禽) 像です。その外側を巡る半円方形帯の方形格内には「百身長樂」などの吉祥句を読み取ることができ、同一の銘文が刻まれた鏡は、まだ日本では発見されていません。外区は幅広く作られ、そこには日輪・月輪や竜像を飾りたてています。

内行人花文鏡

破損していますが、原型はよくわかります。この鏡のみが市内に残っており、所有者の森田氏から柳井市に寄贈されました。紐環は四葉文です。元はその葉の間に「長童子孫」の 4 字を入れています。そこが鏡手文に変わっています。主な文様は、8 枚の半円形を内向きに並べており、「内行人花文」と呼ばれますが、これは天子の座を飾る天蓋の幕を表しています。

柳井市蔵 直径 19.5 cm 青銅製

極楽鏡 (複製のやじり)

極めて大型の鏡で、儀礼用と考えられます。

果立山口博物館蔵 全長 71 cm 青銅製

茶臼山古墳のあらまし

今から約 1600 年前 (古墳時代前期末～中期初) に築造された全長約 90m の南方後円墳 (方形と円形を組み合わせた墓) です。墳丘の斜面は墓石で覆われ、平坦面には道輪が立てられていました。遺体を葬った壘穴式石室は全長約 6m、幅約 1.2mあり、日本一の大型をはじめ、銅、刃、矛、子 (ナイフ)、笄、管玉などが副葬されていました。

